THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第82号
広報委員会発行

関西大学通信

大阪府吹田市山手町3丁目
関西大学広報委員会

新入生諸君へ

学長　中　義勝

本日入学の諸君に満腔の祝意を表するとともに、すでに満を持して勉学の意欲に燃えておられる諸君に、本当にわかるとは何かということをめぐって日ごろの思いよりの一端を述べ、以て心からなる歓迎の言葉としたい。

正法眼蔵随聞記に、「古人の曰く、聞くべし、見るべし、得るべし、亦曰く、得ずんば、見るべし、見ずんば、聞くべし」とある。いう心は、耳で聞いて知るより眼で現認するにしかず、眼で見て知るより手にとってみてその実在感をわがものとするにしかずということであろう。卑近な例をひけば、ものの滋味は見ききするだけではわからず、舌頭に転じてみてはじめてその妙味が実感されるというたぐいである。しかし、それを手にとることができないときには、たとえ見聞を通じてでも、さまざまに想像力を働かせてその妙味に迫ることができる。大要、こんなところであろうと思われる。

これを読書といういとなみに移して考えればどうなるか。私見では、紹介の筆をとることである。つまり、書くことによって真に読むことができるものだと思う。そのためには、自分をも納得させ、他人にも説得的に、さわってみて確かな手ごたえのあるような自分の言葉で著者の思想を翻訳しえたとき、はじめて本当にわかったといえるものだと考えざるをえない。真に読むとは、粘土で塑像を造形するような、具体的で手ごたえのあるいとなみでなければならない。聞いて知り、見て知る以上の実在感を以て知ることである。

ところで、今、聞いて知り、見て知る以上の実在感を以て知るといったが、聞いて知り、見て知るということですら、真に聞き見て知るというためには、普通考えられている以上に、もっと具体的ないとなみが必要であるように思われる。服部土芳はその著『三冊子』で、師の芭蕉の言として以下のようなことを伝えている。

たとえば、風に舞い散る花とか、散り乱れる落葉も、舞い散り、散り乱れるという現象のただなかで見止め、聞き止めなければ心におさまるということはない。そうしなければ、生きた印象も跡かたもなく消え失せてしまう。さらにこれを言葉に写しとるためには、「ものの見えた光が、まだ心に消えないうちに言いとめなければならない」。もののひらめく境にまで入っていって、その光のまだ冷めやらぬうちに言葉でいいとり、いいあてなければならない。

この発想はきわめて斬新で、思わず感嘆を禁じえぬていのものである。もののみえた光がまだ冷めやらぬうちに言葉でいいとりいいあてて、ここそ、本当に見たということになる。ここでも、自分の言葉で真相をいいあてて、ここ真に見たといえるとされている。

しかし、かえりみて、自分には本当に自分の言葉というものがあるのか。こういえば、奇妙なことをいうように聞こえるかもしれないが、自分が何気なく話したり書いたりする言葉は、実はみな借りものの言葉ではないのか。そもそもロゴスというギリシア語には言葉という意味と論理という意味の二つがあり、この点からいえば、真に自分の言葉をもつということは自分の論理をもつということに他ならない。そうすると、著者の思想や論理を自他ともに説得的に紹介するということは、初学者にとっては、この著書を通じて自分の論理を鍛えあげるということに他ならないことになる。

この作業を根気よく継続的にしなければならない。一日さぼれば三日後退する。彫刻家で詩人でもある高村光太郎の次の言葉には身につまされるものがある。「日頃使い慣れた彫刻用の小刀も、十日と使わないでいると、もう小刀の方で幾分他人行儀になる。小刀の柄が、それと手に感じるようでは既にいけない。柄の丸みや重さ軽さがあらためて真新らしく手に感じられるようなときにはよっぽど旨く行かない。毎日みっちり仕事をつづけているときは、わざわざ手に小刀をもって木を刻んでいると思う隙間もない。小刀の刃がすぐ手につづいているようにしか感じないものだ」。これは、語学の勉強について諸君も思い半ばにすぎる実感をもたれるであろうが、思想書を読みつづけているときも同じである。

御入学にあたりいささか所感を述べ、以て諸君を鼓舞するよすがともなれば幸甚である。

千里眼

車を捨てよ、書を読もう！新入生への挨拶である▼「ほうび」に車を買い与えられる新入生も多いと聞く。呆れた話だ。そのためか昨今の大学構内における自動車の氾濫は目に余る。周辺住民を含む他人への日常的な迷惑を考えてしまう。排ガスや騒音はもとより、駐車場をはみ出て道の両側への駐車や凄まじい勢いでの走行のため、危険を感じながらの歩行、注意を受けて逆に食って掛かる学生……。ほとんど人としてのモラルの問題だ▼電車での通学が至便な故に歩こうと言うだけではない。本紙第77号千里眼に説く如く、自動車と思考とは相入れぬものだからだ。それに自動車では本も読めぬし、ものも考えられぬ。やってもらったら大変だ▼もっとも、衣食費を本代に回したかつての貧書生は何十万何百万もする車やその維持費のことを考えるにつけ、なぜ本を買わぬのかと思ってしまうのだ。大学は自分の時間がたっぷり持てる所だ。大いに青春を楽しむのがよいだろう。それが自動車を乗り回すといった程度のものでないことを切に祈る▼この四年間は、ためにする読書や与えられるそれでなく、意の向くままの自由な読書と思考への可能性をもった四年間だ。そんな習慣がない学生はせっせとツンドクすればよい。自動車よりは安全だし、いつも眺めていれば、ふとその気になるかもしれない▼学生時代、古本屋通いに精出すうちに、オヤジさんから声を掛けられた時など、一人前になった気がしたものだ。そして手にした本を読んだり、ものを考えるための「三上」は、「枕上」の他に、自動車でなく電車の「車上」と車の通らぬ「路上」であった。奇妙な挨拶の由来である。（T・K）

新入生諸君へ

広い視野で

法学部長　原　英次

相撲をよく見ているものである。

難関の門一本の高い司法試験に合格するための最短距離を突っ走るのは、どうするのが一番よいかというのである。

「入学前から試験科目だけに限定しないで、幅広く勉強をしと言うと、「そんなことをしていて間に合いますか」と反論されてしまう。

四方年間の学生生活は長いようでも短い。

卒業後のあせらない人生を思うと、卒業の時点で、志望に合致するポスト空席保証という約束が無理かもしれぬ。何しろ「法科の関大」に入学した諸君だ。

とりわけ、関西法律学校として新入生諸君、法学部への入学おめでとう。

長い学校教育の最終コースで法学部を選択した学生諸君は、誰もが一度は司法試験を考えるようだ。

入学おめでとう。

卒業後の時点で、志望に合致するポストを確保したい約束ごとが無理かもしれぬ。何しろ「法科の関大」に入学した諸君だ。

そんな学生に接すると、卒業まで司法試験に合格すれば、どんなに幸福であろうと思われ、かけたに違いない。

また、時間的にゆとりのある学生時代に、とりわけ若々しく自由な新人生の時期に、文学や音楽、音楽やスポーツなどの情操を高めて貰いたいと思う。

そうしたことは、新入生諸君の人生の時期に、文学や音楽、音楽やスポーツなどに、手を染めるのも、諸君自身の人生の幅を広げていくことだろう。

将来教師になる者は、学生時代に遊ばれやすいことを思えば、いろいろな情報の変化を見極め貪欲になる。

そうしたことは、新入生諸君のうち、教師になるかもしれない。

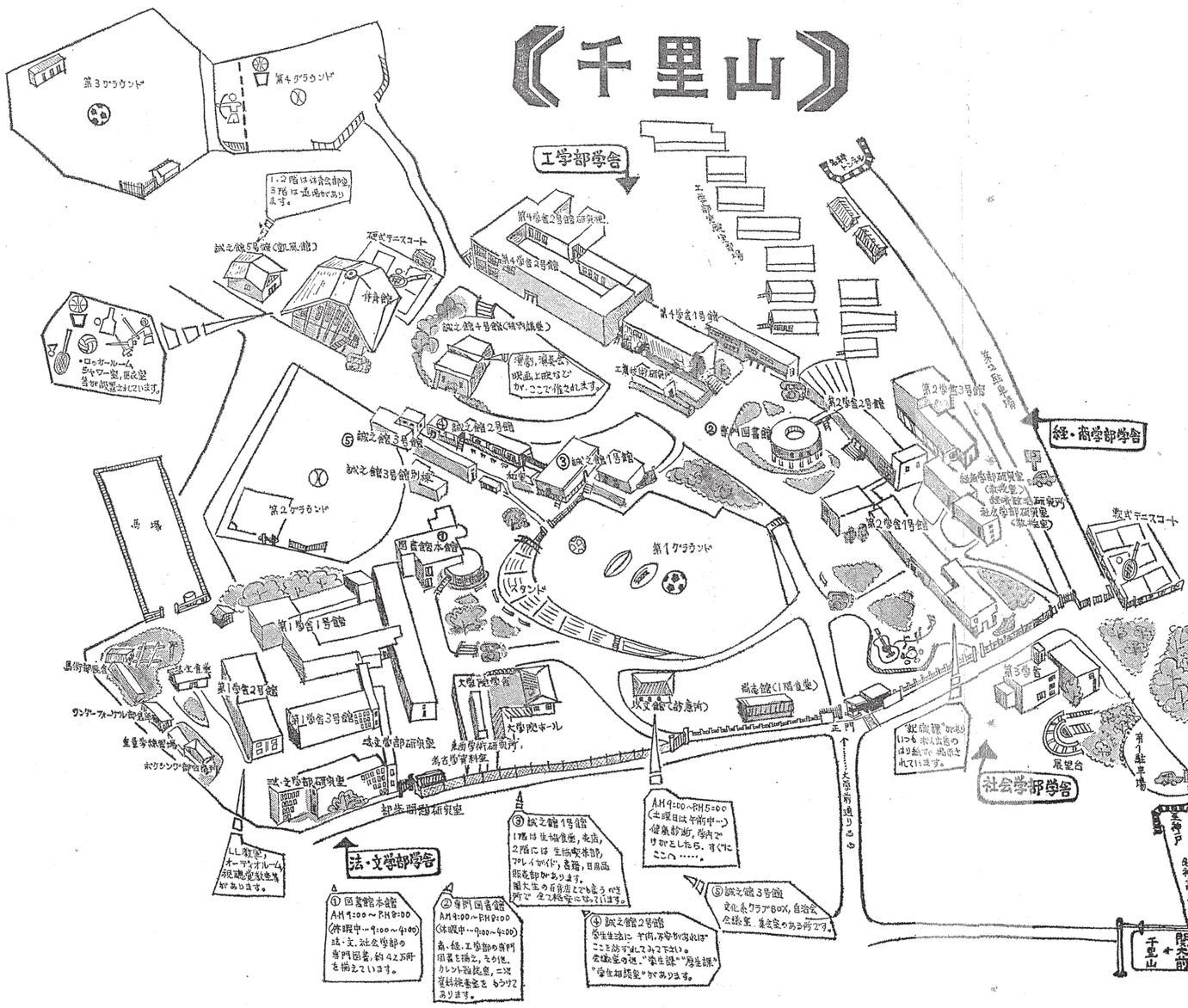
そうしたことは、新入生諸君の教師の資質の向上にもつながるかもしれない。

教師になるためには、学生時代に学生活動に参加したり、学生自治会の活動に参加したりすることは、教師になるための資質の向上にもつながるかもしれない。

関西大学学舎案内 '78

ポカポカ陽気に誘われて
関大あたりをひと歩き…

《千里山》


第3グラウンド
第4グラウンド
1・2階は体育会部室、3階は道場があります。
認之館5号館（凱風館）
硬式テニスコート
体育館
ロッカールーム
シャワー室、更衣室
等が設置されています。
工学部学舎
第4学舎2号館（研究棟）
第4学舎1号館
認之館4号館（構内講堂）
理部、演奏会、映画上映などが、ここで催されます。
工業技術研究所
第2学舎2号館
第2学舎3号館
経済学部研究室（教授室）
社会学部研究室（教授室）
第2学舎1号館
第2学舎4号館
第3学舎
第3学舎
第3学舎

総合コースについて

総合判断力を養う
多角的な視野に立って

教養部長　池田　進

私たちの大学では、今年度は三つの総合コースの授業科目が、一般教養科目の中に開設される。「部落解放論」「相撲」「現代社会」「都市論」の三つがそれである。

学生諸君は卒業までに、それぞれの学部が定める単位数の一般教養科目を修得せねばならないが、この三つの総合コース授業科目のうちのいずれか一科目、八単位まで卒業単位に含めることができるようになっている。（ただし、建築学科以外の工学部学科は一科目、四単位を卒業単位に算入できる）

一つの課題を一つの視点だけからに限らず、人文科学や社会科学や自然科学の、あらゆる観点から眺めなおし、多元的にものを考える力を養っていこうというのが総合コースのねらいである。講義項目をみれば早くに気づくように、総合コースの授業科目には、それぞれ複数の担任者が配置されている。一つの授業の中にいろいろの先生が交替しながら一つのテーマを講義するというやり方は、高校生までの授業では絶対できないもの。それゆえ、一方には、専門分野のこだわり研究者が集まって、一つのテーマを十分に時間をかけて共同研究し、討議をしてまとめあげたものを、各自の専門の視点をくりとりにして受講生諸君の前に提供しようというものなのである。

なぜこのような共同研究、学際的研究が学問研究の進歩とともに必要になってきたのであろうか。それは一つには、学問研究の深化に伴って、細分化されてきた学問の成果を、総合的に統一しなおすことが、人類の歴史において、都市は人界に、今や都市の危機時代を迎えつつあることになろう。そのように、都市にかかわるさまざまな問題のうち、近年になって、都市に対する研究が急ぎ、まとめて進められていくべきであろう。

このように、都市にかかわるさまざまな問題のうち、近年になって、都市に対する研究が急ぎ、まとめて進められていくべきであろう。

積極的姿勢の中で

テーマ代表者　鈴木　祥蔵

部落解放論

昭和五十三年度の新入生の皆さんに、総合コース「部落解放論」の履修をすすめます。

"総合コース"というのは、複数の担当教員が入文・社会・自然の三系列から出て、夫々の専門領域を踏まえ、同一のテーマを追求し講義するというものです。

また「部落解放論」はわがくに が過去四百年にわたって政治的、経済的、社会的関係において、差別部落の人びとを強制しての基本的、推定強い縛りつけてきた事実を明らかにし、差別の完全解消に向けて何をなしとしなければならないかを明らかにする講座です。

わが関西大学では、一九七三年（昭、四十八）に学長の自己批判書が出され、「関西大学はこれまでの総力をあげて部落問題解決のために取り組む」ことを表明しました。その次の年、つまり一九七四年四月から、二般教育科目に四単位の「部落解放論」がおかれ、翌年、九七七年かからそれが総合コースとなったのであり来ます。したがって総合コース「部落解放論」は今年度で四年目に入るわけです。

新入生の皆さんの中には、小学校、中学校、高等学校においてまだ未だ未完結だったのではないかと思われます。過去三年間のこれ「部落解放論」の履修者の多くは、「部落問題について講義を聞いて、人権の問題について考えるようになった」という感想を述べています。

しかし、その教育はそこから程度の部落問題について講義を聞いて入学して来た皆さんの「部落解放論」の学習へと進まねばなりません。

今年度の講義に向けて、担当者の会議が何度も開かれ、従来の欠点を取り除くための大幅な改善を図ればよりよい教育ができるものと信じています。

第一には、大学の部落問題への組織的な取り組み体制をつくり上げてゆくこと。

第二に、講師担当者間の意思を統一し、研究、調査、その他の相互交流を強化させる方法を講ずること。

第三に、総合コース「部落解放論」の大テーマを共通の小テーマにわけ、小テーマを定められた、二人ないし五名の教員が担当する受講生は共に講義をうけることにすることで終わることなく、この総合コースに「参加」するという意識をもって共に問題を追求し、自己の生き方を点検すること、を初に提案するものです。

（文学部教授）

情報の占める役割
情報と現代社会

テーマ代表者　足立　利雄

現代社会においては、従来の金、物（エネルギー）、人間の三位（エネルギー）、情報、の四つの要素の結合のほかに、情報のしめる役割が非常に重になってきつつあるといわれる。「情報社会」「情報化社会」「情報時代」などと呼ばれるものはこのことである。

その原因の一つは、情報の処理の技術の進歩、コンピューター情報産業があるいは知識産業とよばれる高度の、産業構造のなかで急速に比重を加えつつある。

我々自身生活においても、情報に対する依存度は非常に高くなっている。たとえばテレビ、新聞などのマスコミによってつくられている情報、のなかに、我々は意外に流されているといってもいいだろう。

また、いわゆるホスト・インダストリアル・ソサエティ（脳工業社会）、つまり農業産業、工業社会のなかに新しい産業が出てきつつあるとも言われている。

社会のなかに新しい産業が出てきつつあるということは、工業生産の新しい発展のためにも、工業生産の新しい発展のためにも、社会のなかに新しい産業が出てきつつあるということは、当然のことながら、社会の構造の変革をも、ともなうものである。

もちろん、そこには考えなくてはならない問題が多くあるのである。

多くの問題があがれがつつあるが、まず、情報の流れと質量が、何のために、誰によって、いかに行われるかによって、脳工業社会を迎えている先進諸国、のみならず発展途上国、社会全体の将来に決定的な影響を及ぼすだろうことは、容易に想像できる。

しかしながら、この分野はコンピューターを中心とする技術的な領域から、政治、経済、文化、社会、そしてマスコミといった、複雑な問題が絡み合っているものである。

Aチーム（工学部と第二部全学部担当）
竹尾治一郎　言語と情報
井上　宏　映像文化
足立　利雄　マスコミと世論
結尾　剛光　人間のコミュニケーション

Bチーム（第一部法・文・経・商・社担当）
藤田　彰久　経営と情報
大石　準一　広告と現代社会
中村　悠行　コンピューターと情報
山川　慧巳　政治と情報

（社会学部教授）

各分野からの研究
都市論

テーマ代表者　野々村五四男

人類の歴史において、都市は人界に、今や都市の危機時代を迎えつつあることになろう。そのように、都市にかかわるさまざまな問題のうち、近年になって、都市に対する研究が急ぎ、まとめて進められていくべきであろう。それは、専門分野のこだわり研究者が集まって、一つのテーマを十分に時間をかけて共同研究し、討議をしてまとめあげたものを、各自の専門の視点をくりとりにして受講生諸君の前に提供しようというものなのである。

なぜこのような共同研究、学際的研究が学問研究の進歩とともに必要になってきたのであろうか。それは一つには、学問研究の深化に伴って、細分化されてきた学問の成果を、総合的に統一しなおすことが、人類の歴史において、都市は人界に、今や都市の危機時代を迎えつつあることになろう。そのように、都市にかかわるさまざまな問題のうち、近年になって、都市に対する研究が急ぎ、まとめて進められていくべきであろう。

このように、都市にかかわるさまざまな問題のうち、近年になって、都市に対する研究が急ぎ、まとめて進められていくべきであろう。

キャンパス情報

人事異動

▼法学部
昇任（四月一日付）
助教授　山中敬一
専任講師　市川訓敏
同　千藤洋三

▼文学部
新役職（三月一日付）
学生主任　教授　坂本悠雄
新任（四月一日付）
教授　大谷崇照（英語学）
同　河野通明（他理学）
同　津田秀夫（日本史）
助教授　モリス・ヨイ・オーガスティン（Morris J Augustine）（比較文化学）
同　尾崎　實（中国語学）
同　吉田永宏（国文学）
同　玉田勝郎（教育学）
同　奥村　透（英文学）
専任講師　杉谷眞佐子（独文学）
同　松浦　章（東洋史）
同　桑原　孝子（フランス文学）
同　鄭田清一（倫理学）
同　小川静代（英文学）
昇任（四月一日付）
教授　川本武之
同　坂田祥伸
同　寺川　央
同　平原勇弘
同　山岡泰造
助教授　島崎　守
同　濱畑寛治

▼経済学部
新任（四月一日付）
教授　熊谷尚夫（理論経済学）
昇任（四月一日付）
教授　岩井　浩
同　生田　靖
同　藤田彰久
助教授　加藤義忠
同　永沼博道
同　広田俊郎
専任講師　鍛治邦雄

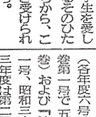
▼社会学部
昇任（四月一日付）
助教授　中道　實
専任講師　木村淳一

▼工学部
昇任（四月一日付）
教授　穴垣之男
同　井上雅夫
同　田尾陽一
同　三上市蔵
助教授　植田勝弘

▼学生部
新役職者（三月一日付）
学生部長　文学部教授　小川　悟
学生部長代理　文学部教授　青木機一郎

小川悟・新学生部長

「冒険には私学の魅力ある自由の雰囲気を最後の一人になっても守り、誰よりも学生を愛し」と、「先生の横顔」にも書かれているように、その興味たる風貌、「ボク」、「ボク」、「関大の小川です」、「学問とは」、「大学とは」、と、「文芸学とは」と、迫発されたからの、教職員や学生との談論風発ぶり。特に昨たしの一二年は、学内や学部、学科内で、次々と激職についていただく、本当に「本学で彼の名を知らない人はない」ほどの、「関大の小川」、「学問とは」、「大学とは」、と、迫発されたからの、教職員や学生との談論風発ぶり。特に昨たしの一二年は、学内や学部、学科内で、次々と激職についていただく、本当に「本学で彼の名を知らない人はない」ほどの、「関大の小川」、「学問とは」、「大学とは」、と、迫発されたからの、教職員や学生との談論風発ぶり。特に昨たしの一二年は、学内や学部、学科内で、次々と激職についていただく、本当に「本学で彼の名を知らない人はない」であろう。近代ドイツ文学や比較文学の研究、そして『第三帝国のドイツ文学』や『ローサ・ルクセンブルクの暗殺』等の訳書を出版され、この秋にもナチス時代のドイツ文学に焦点をあてたシンポジウムの計画も立てておられたとの矢先での学生部長、就任である。



「じっくり本を読む時間がほしいなんていうのこう繰り返して言っておられたが、これ当分はまだ、なかなかかなられそうもない。学問を愛し、学生を愛し、関大を愛するそのひたぶるな気持ちから、この新学生部長に期待を寄せられたのであろう。

ただ年来、胃が弱いのこと、ご自愛を願う。

七氏に学位を授与

昭和五十三年三月二十七日十三時から、関大会館貴賓室において学位記授与式が挙行され、つぎの七氏に学位が授与された。

授与者、学位の種類および学位論文の題目は次のとおり。

○（法学部教授）
法学博士
「民事訴訟論」
上林　良一

○（文学部教授）
文学博士
「近世後期朱子学の研究」
酒井　憲晴

○（同志社大学助教授）
工学博士
「化学反応における溶媒効果の分子軌道法的研究」（原題は英文）
中村栄一郎

○（日本セーフティ㈱）
工学博士
「通常の開閉器を用いないシンカル重合に関する研究」

なお、学位授与年月日は、上林、水田、王井、内山、樋口、酒井の六氏については、昭和五十三年三月八日、また中村氏については、同三月三十一日である。

法学会

法学会は、法学部学生・院生および専任教授を構成員とする研究団体である。在学生三五〇〇名が入会しており、専任教員四五名全員が評議員として運営に当たっている。会長は法学部長である。

主な活動内容は、「法学論集」（今年度六号、昭和一二六年第一号）および「法学会報」（今年度第二号、昭和一二六年第一号）の発行、既帯年度の論文募集に入選作を掲載する。また、法学会時代に、昨年度三年間の法学会報を収録した小冊子『学内試験問題集』が毎年十二月に配布される。なお、重要な法学会の行事として、四年に一回「総会」が開催され、活動内容の報告を行うと共に、抽選会・余興などを通じて会員相互の親睦を図っている。前回は、昭和五十一年六月に琵琶湖の島めぐりを兼ねた「はりま」船上で開催された。

法学会事務局は、法文研究棟（旧研）四階にあり、中村さんが事務に当たっておられる（月・水・金出勤）。

文学会

文学部に属する専任教員の研究会で、関西大学文学会編集『関西大学文学論集』が、年五回発行され、現在二七巻二号まで出版されている。また、『関西大学文学会紀要』（年二回）、『関西大学文学会』（年三回）、『英文学会紀要』（年一回）、『国文学』（年三回）、『関西大学国文学会紀要』（年一回）、『関西大学国語国文学』（年一回）、『The Forum of English Literature』（年一回）、『English Literature』（年一回）、『関西大学英文学会紀要』（年一回）、『関西大学英文学』（年一回）、『関西大学英文学会』（年一回）、『関西大学独逸文学』（年一回）、『関西大学独逸文学会紀要』（年一回）、『中国文学会紀要』（年一回）、『中国文学会』（年一回）、『関西大学中国文学会』（年一回）、『関西大学教育学会』（年一回）、『教育学』（年一回）、『関西大学哲学会』（年一回）、『哲学』（年一回）、『関西大学国文学会』（年一回）、『関西大学国文学

桜の下でのムダばなし

谷沢　永一

アルバイトサロン、略してアルサロ。大阪が、生んで育てた新種である。ときは昭和二十五年、それも八月十五日という皮肉な日を選んで、ところはもちろん千日前に、はなばなしくオープン。爆発的な盛況を見てとるや、真似は早い者勝ちと、新規開店があいついだ。

後続の模倣屋たちがいつも苦慮するのは、先発のシニセに対抗する工夫。このとき隠れた名天才がいて、日本CM史に燦然と輝く名作を残した。感嘆すべきその標句は言う、「女房は貰いたて、アルサロは出来たて」。

すなわちそこでもう一句、是非ともその下につけくわえたいセリフがある。極めつきの名作に一筆いれたい悪趣味な私のいわく、女房は貰いたて、アルサロは出来たて、大学生は入りたて。

バクチでもせよ

好奇心は人間のイノチである。泰然自若は怠け者の虚勢。何を考えているのか、うかがい知れぬ大物風、実は何も考えていないウスノロだ。新人生の物見高さを、一生かけて保持し培養する心構えが、人生の味わいを深めるコツ。きょうきょう、じうじう、まじまじ、しげしげ、野次馬の心躍りは精神のバネである。

孔子は言った。腹いっぱい食べて一日中、頭を働かせることのない人は、問題にもならぬ人間だ。博奕（はくえき）なという勝負ごとの遊戯があるだろう。あれをしてでも遊ぶほうが、まだ何もしないよりはましだろうな。――博奕なるものあらずや、とは千古の名言である。現代に言いかえれば、さしづめ、パチンコ麻雀なるものあらずや、というわけ。「論語」はイカス書物である。

古典は新品

孔子を煙たい頑固じじいに仕立てあげたのは、センスのない漢学者たち。ここに宮崎市定という当代まれにみる豪傑学者があらわれ、孔子の一語一句をビリッとした現代日本語におきかえた。フキカエの名人芸である。すなわち「論語の新研究」（岩波書店）、わずか三百八十六のスラリとした一冊だが、これほど密度の高い本は少ない。さきに引いたのは、その第四百五十六章。宮崎市定の手腕によって、はじめて孔子は我れ我れの前に、現代の感覚でフランクに語る、話せるヤツとしてよみがえった。

古典は、現代人にとって必要であるゆえに古典なのだ。大きいことは、或いはいいことかも知れないが、古いことは、それだけでは決していいことではない。古いものに価値があるのは、今の私たちが、それを必要とする場合にかぎる。

宮崎市定がエライのは、漢文を読みこむ単なる学力によってではない。人間が作りだす社会、それをつくづく観察するのが面白くてたまらない、そう言いたげな宮崎市定の、老いてますますさかんな物見高さ、それが古典に息を吹きこんだのである。世間知らずは、何をやらせてもデカンのだ。

古典は、ウッソウたる書庫の奥に眠っているのではない。現代に生きかえらせる問題意識をもった新刊のなかにこそ、実は古典の心臓が鼓動をうっているのであることを、「論語の新研究」は鮮烈に教える。

学問なんて

学問なんて、それほど功徳のあるものではない。すこしばかり学問をしたために、バカになった麗品は掃いて捨てるほどいる。学力の高さと、人間の立派さとは、ほとんど関係がないようだ。

かつて中野重治は、森鴎外を論じてこう言った。――「確かに彼には学者および詩人としての魂があった。けれども、他のすべてがなくてただ二つそれあるために人を学者・研究者に追いやってしまったところのもの、他のすべてがなくてただ二つそれあるために、あらゆる抵抗の甲斐なく人が泣く泣く詩人となる外なかったところのもの、かかるものとしての学者の魂、詩人の魂はついに鴎外の魂でなかったのである」。

学問は、「泣く泣く」学者とならざるを得なかった、ごくごく少数の奇人変人にまかせておけばよい。学問に気がねしてみてもはじまらぬ。大学は、すでに学問の府ではない。また、学問の府であってはならぬ。〝学問〟を学ぶのではなく、〝人間〟を学ぶこと、そこにだけ、現代の大学の存在理由がある。

読書なんて

読書は喫煙と似たようなもの。好きな銘柄を欲しいだけ、或いは経済の許す範囲で、黙ってプカプカふかしておればよいのである。本をたくさん読んだからといって、別になんの取り柄もない。人より多量にタバコを喫ったからといって、尊敬せねばならぬリクツがないのと同じだ。

書物は食料品。自家消費用の嗜好品である。大食もあれば少食もあれば偏食もあるのが普通。つまりは食欲と味覚がすべてを決定する。ウマイものを更にできるだけウマく食うのが、人生でトクをするための秘訣第一条。味痴は最大の不幸である。

味覚を磨いて豊かにするのは、自分ひとりの努力だけ。他人に助けて貰うわけにはゆかぬ。また一方、味覚が鋭敏になったからといって、それが一律するのも愚の骨頂。生き甲斐を自分自身の内部に求める修錬を経ていない人は、なんともハタ迷惑な存在である。

売れ売れ

舟橋聖一は、珍談ゴシップを提供し続けることで第一人者であった。目白の大邸宅に三島由紀夫を招待したときの話も有名。これが書斎、こ屋、いちいち連れ歩いたあと、これが女中部れが台所、と最新設備の前へ案内し、そなえつけの大きなコメビツをガラガラと引きだした舟橋は、これ、この通り、コメが一杯はいっている、と指し示したという。一生、コドモのまま通した気楽人であった。

蔵書を得意がる人もまた、舟橋と同じように滑稽である。書物は、使いこなすための道具なのだ。書物崇拝や書物偏執は本末テントウ。用の済んだ本、むつかしすぎるか面白くないか、さしあたり手を出す気のおこらぬ雑儀な本は、片っ端から次から次へと、売りとばすか捨てるかして、眼前から追放するのが、精神衛生にいちばんよろしい。

前世の因縁で、莫大な財産を相続した果報者でないかぎり、買った本を溜めこむ一方なんて、出来るわけがない。書物を処分したことがないと誇るウツケ者は、熱意と好奇心がおとろえて、新しい本をほとんど買わなくなった、知的隠退者にきまっている。本は売るもの捨てるもの、空いたスペースに、しょっちゅう新入りを迎えるべきなのだ。

完読無用

買った本は必ず読めとか、読みはじめたら最後まで走り通せとか、クダラン御忠告に耳をかしてはならぬ。本はツンドクだけでもよし、眺めるだけでもよし、見あきたらページも開かず即ち売ったらよい。書物をひっくりかえってもみず触りもせぬ絶交状態にくらべて、握手するだけでも一応の感化は受けるものだ。

たとえば「人類の知的遺産」全八十巻（講談社）や「世界の名著」全八十一巻（中央公論社）などというシリーズもの、全部を読み通す必要はさらさらない。定期刊行の全集類は雑誌と同じ、気のむいたところだけ拾い読み摘み読みすべし。解説のみに目をさらすのも、思えば相当な勉強である。

全巻を読破せねばと脅迫観念にとりつかれるから、未読のまま色あせてゆくのを眺めて、自己嫌悪におちいる。完読の勧めは、もともと実行不可能であるのみならず、人を読書から引きはなし、逆に、無為怠惰にへたりこませる、悪魔のささやきと言うべきだ。

（文学部教授）

新刊紹介

商学部教授　生田靖著
「農業問題―現代日本資本主義と農業」
（同文舘・一五〇〇円）

わが日本経済が高度成長（資本の高・強蓄積）を続けていた過程で、日本の農業・農民にはいろいろな問題が起こりました。本書はこれらの問題に、食糧問題、土地問題、労働力問題、市場問題という四つの柱を立てて、検討を加えています。本書は、このようなユニークな接近方法で、農業問題をわが国の経済構造あるいは現実問題と関連させて解明し、現代資本主義における農業問題に「資本の論理」が貫徹していることを明らかにしています。この点は大いに特筆する価値があります。

本書の内容は、第一章食糧問題としての農業問題、第二章土地問題としての農業問題、第三章労働力としての農業問題、第四章市場問題としての農業問題から成っております。いずれの章でも、農業問題の実態把握、その本質究明に成功しております。その上、農民の対応策まで示されています。資本主義農業問題に関する基礎理論が適宜に述べられていますので、初学徒にとっても、本書の論旨は理解されやすいものとなっています。本書で今日の農業問題の所在をたやすく知ることが出来ます。

学生諸君も、農政学徒も本書に啓蒙されることが多いでしょう。農業問題が極めて重要である時だけに、是非本書を熟読がん味されんことをお薦めいたします。

（東井正美）

文学部教授　藤善真澄ほか共著
「巨大遺跡」
（古代文明の謎と発見6）
毎日新聞社・一三〇〇円

本書は今日に残る宮殿建築はじめ古代諸文明の巨大遺跡の学問的紹介である。石や土で築かれた文明の遺跡は、古代の人間の営みを生き生きと語りかけてくる。藤善教授（東洋史）担当の万里の長城も、三千年もの中国の歴史と、それに纏わる様々な人間模様を織りなした遺跡の一つである。北方遊牧民族匈奴の侵入を防ぐという名のもとの、山海関から嘉峪関に至る延々二七〇キに亘る大城壁がいわゆる「万里の長城」であり、現在の構築は明代のものである。著者は、前六世紀春秋・斉国にはじまる長城から説きおこし、秦始皇帝の時将軍蒙恬に命じて築かせた臨洮から遼東に至る万里余りの長城、そして漢武帝、北魏太武帝、隋文帝・煬帝の築城に至るまでを、各時代の匈奴の侵入と漢民族王朝の対応の有様、それに纏わる逸話をも交えて叙述する。匈奴が匈奴に対して長城を築いた北魏の時代、版築による建築法、烽台の機能を説明した部分などは著者の蒐書の一端が見られる。烽台の説明を読むと、杜甫の「烽火三月に連なる」にも実感が伴う。蒙恬の築城に対する司馬遷の非難について、著者の司馬遷論も見られる。単なる解説でなく、今日の学問的成果を十分消化した上での仮説、新評価を試みた点で、広くすすめられるすぐれた書である。

（坂出祥伸）

隨想

プロセスの楽しみ

春日　淳一

学生時代から私は各地の都市を見て回るのが好きだった。というのはなるほど早く着くというような感じである。こういう点では便利だが、どうも旅のおもしろさをそぐような気がしてならない。

さて、目的地へ着くと、駅前を起点にしてその町の主要な市街地と思われるところを歩いてみる。それも同じ道は二度通らないように「ひと筆書き」の要領でできるだけくまなく回る。限られた時間に、しかも徒歩だからたかが知れてはいるが、メインストリートあり、うらさびれた旧道あり、生活のにおいのする小路ありといったぐあいで、結構町の全体像をつかむことができる。そんなに歩いては大阪でも大きな書店へ行けば地方出版物コーナーがあって、現地まで足を運ぶことなく同じ本が手にはいる。しかし、自分の足で集めた本には一冊一冊訪れた町の印象がしみ込んでいる。ここでもまた私は本を手に入れるまでのプロセスを大切にしたい。

以上要するに私の旅は「プロセスを楽しむ旅」といえそうである。快適に要領よく回るという旅の常識からするとずい分不合理なやり方にみえるのも、結果でなくプロセスを重視しているからである。ちなみに、すべてが目標に向かって合理的に運ばれる現代社会とは対照的に、未開社会の人々は行動のプロセスを非常に重視していたことが知られている。たとえば現代社会では物の交換は大部分、貨幣を仲立ちにしてきわめて機械的かつ能率的に行われているが、未開社会では交換のプロセスそのものが社会の統合にとって大きな意味をもっており、長い時間と多くの人手をかけた儀式的交換が各地で観察されてきた。こうしてみると私の旅の精神は未開人の精神と同じなのかもしれないという気がしてくる。最後に蛇足ではあろうが、新入生諸君も単位と卒業証書の取得だけをめざすのでなく、プロセスとしての大学生活全体を充実させてほしいものである。

（経済学部助教授）

▶編集後記◀

新入生諸君、入学おめでとう。ここが諸君の学園だ。迷い子にならぬよう、初心忘れることなく、悔いなき青春を駆歌されることを期待する。

例年のことはいえ、各クラブ・サークルの活発な新入生勧誘の呼び込みに発奮した編集子も、学生諸君愛読の妙手として、やっとの思いでマンガの登場を願ったが、それこそマンガにもならぬようにならないよう、ヨリ一層の愛読を切望する次第である。

なお、本四月号から小川・木田・浅田先生に替って、星野・松尾・福瀧先生が新委員となられた。今後とも一段のご叱正・助言をお願いします。